

「親指ありがとう」～長い闘病生活から学んだもの

MY

長い闘病生活が始まったのは、今から 11 年前の夏。それまで、大きなけがや病気なんて一度もなかったのに、まさか、入院することになるなんて……。食欲がなく、原因不明の高熱が続き、点滴しても下がらない。検査の結果、腸腰筋が腫れて膿がたまっているらしいということで、手術を行った。

しかし、数日たっても熱はあいかわらず高いままだった。窓の外の景色を見ては、ため息ばかりが出た。明るいうちはまだましか、夜暗くなると、ベッドで家族、子どもたち、友人、同僚らの顔を思い浮かべては涙を流した。

点滴によるいろんな副作用にもなやまされた。頭がぼんやりしたり、食欲がなくなったり、下痢になったりした。さらに、この病気が再発しないようにと放射線も繰り返しあてることになった。そのうち、髪が全部抜け落ちていった。

でも、つらい状況の中で、元気づけられたこともたくさんあった。たとえば同じ病室の人たち、よく冗談を言って笑わせてくれた。坊主頭のおじいちゃんが、長髪のかつらをかぶって外泊から戻ってきて、「ただいま」と言ってかつらをとったときは、みんな大笑いした。

体に力が少しずつ入るようになったときに、見舞いに来てくれた方から教えてもらったことがある。動くようになった手や足を順にほめていくといいというのだ。右手の親指が動くようになったとき、その指を見て「親指ありがとう」と言ってみた。健康なときにはあたりまえみたいに通り過ぎていたことのひとつひとつに心を通わすことで、生きる喜びを感じることができた。

家族だけでなく、親戚、教え子、保護者、友だちなど多くの人たちが見舞いに来てくれた。自分は一人で生きているわけじゃない、みんなに支えられ励まされて生きている実感がわいた。また、担当医、看護師の方々にも、ずいぶん元気づけられた。そのときに、ことばには、元気や勇気、希望を与える力があるんだなあとおつくづく思った。

私は教師をしている。あの長い闘病生活を乗り越えて、ひだまりのようなあたたかさを感じられるクラスづくりをいつもめざしている。子どもが勇気の出せることばをかけたいきたいと思っている。